

方法としての「世人」・「世の人」をめぐって

—初期物語・日記文学・『源氏物語』の用例に即して—

金 順 姫

序

中古の初期物語や日記文学にみられる「世人」・「世の人」は不特定多数者としてその言動が作品世界の構成上無視しがたい役割を果していると思われる。実際問題として、当時貴族社会の人々にはそれが称賛であれ批判であれ「世人」「世の人」という視点は意識されていたはずであり、その意識が作品にあらわれるのは当然の事であろう。しかし作品内における「世人」「世の人」は単なる現実の反映という意味ではなく、それぞれの作品を構成する方法として設定され位置付けられていたと思われる。それがどのようなものであったかを検討してみたいと思う。

例えば、「世人」「世の人」について『竹取物語』『宇津保物語』『落窪物語』などにみられる用法と、『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』などに見られる用法との間にはかなり顕著な差異があると思われる。それが『源氏物語』に至るとさらに独自の物語の方法として位置付けられているかと思われる。そうした流れを概観しつつ、「世人」「世の人」の、物語と日記文学における意味や方法としての「世人」・「世の人」をめぐって

—初期物語・日記文学・『源氏物語』の用例に即して—

法を考え、その役割と性格を考察したい。

尚「世の人」の問題について稲垣智花氏「大鏡の方法」^(註)は、次のようなことを論じられた。『大鏡』における「世の人」の用法は当時の人々の評価というある種の客観性をもったリアリティを与えるものであるとともに、「世の人」に発言をさせることで、語り手という一定の視点からのみかたられた一面的になりがちな話題のなかに別の角度からの評価を導入し、そうすることで内容を多様化し、リアリティを増すのだといい、それを主観と客観の巧みな結合と言われた。これは専ら「大鏡」の方法としていわれたことであるが、『大鏡』だけに限る方法では必ずしもあるまい。他の作品についても多かれ少なかれ言え得る面があると思われる。本稿ではそうした指摘を参考にしながら初期物語・日記文学における用法から『源氏物語』の第一部あたりまでを対象として「世人」「世の人」の各作品における方法的な意味、その役割や性格を検討してみることにする。

はじめに「竹取物語」の例を見つゝみる。用例は次の二例のみである。

(一) 世の人々、「阿部大臣、火鼠の皮衣持ていまして、かぐや姫にすみたまふとな。ここにやいます」など問ふ（小学館全集本 七四頁）

(二) 「……みやつこまろが手にうませたる子にてあらず。昔、山にて見つけたる、かかれば、心ばせも世の人に似すはべりと奏せさす。（同 九二頁）

まず（一）の例は阿部大臣の噂をする物見高い「世間の人」の意味であり、登場人物としての「世の人」であるが、阿部大臣やかぐや姫などの内面にかかわることはない。つまり、主人公たちにとつてあくまでも外在的な存在であるにすぎない。（二）の例はかぐや姫の比較の対象とされる普通の「世間の人」の意味である。ここでも「世の人」は当事者（比較される者）の内面にはかかわっていない。「竹取物語」の作中世界における「世の人」の位置はごく単純に平面的に存在しているだけといってよいであろう。彼らは作中世界の主人公たちにとって外在的な存在であり、主人公達の内面にかかわることはない。また彼らの存在が物語の筋を左右するような役割を果たすこともない。このような「竹取物語」の用法が「宇津保物語」になるとはるかに複雑な様相を示すように思う。

「宇津保物語」の「世人」「世の人」の用例は全部で十六例で、そのうち「世人」二例、「世の人」十四例である。「世人」の二例

は次のようである。

(三) 「わかき人の親物し給はず、御口入るゝ人もなきは、いかでかは。さても世人こそ。さしもあらで有りぬべかりける人も、世をすぐるむやうも知らで、親とて有りし人も呪ふやうに（岩波大系本 蔵開下 四六二頁）

(四) うけ給はりぬ。客人達いとめでたう、はなやかにてまうで給ふなりしをなん、いとかなしううけ給はりし。世人のやうにてとか。いでや、人に見えぬべき所なりとも、今更にさる心をばいかでか。（同 國護下 二九〇頁）

例（三）は、式部卿宮の中君を三条の小家に迎えた兼雅が北の方（仲忠母）に中君への配慮を頼む。それに対して、北の方が中君の不幸な境遇に同情するところである。「さても世人こそ」は、中君の財産を使い果たすと、彼女を捨てて去って行った使用人たちの薄情さをひどいものと北の方が嘆くことばである。「世人」は利害損得の計算たかい人間たちであつて、中君を不幸にした源だといつてよい。

例（四）は、出家した仲頼が、北の方に対して結婚したいなら結婚すればよいと手紙を送るのに対して、北の方が、今更世間並みの結婚をする気持ちはないと答える文面である。「世人」のあり方は、自分の人生をどうするかという時の判断の基準になっていることである。それは作中人物に対して社会の常識や慣例などを体現したものを意味している。「世人」はそのように登場人物の境遇また彼らが自分の行動や判断を固めて行くことに関わつて無視しがたい力をもつものとして設定されているのである。

「世の人」の例は次のようである。

(五) 大殿、梨壺と物語聞え給ふ。「此の夢のやうなる事は、宮まめやかに思したりや。さきさきも世の人もよからぬ事いはるれば、これをなむ夜晝思ひとするを、今宵はのめかし給へるは、いかに思したるぞ」君「しろしめししいいかゞは、とかく思はずらむ事は知らず。罷でむと申させたりしかば……参う上りて侍りし」大殿「世の人のすることをいかがは」君「差やうになむ」大殿「さらばいと嬉しかなり。後はとまれかくまれ、知るとだにの給はば、恥じ隠れぬべし」(同) 蔵開下 四七〇頁

(六) 宮の君の聞え給ふ。「自ら御覧じけむ。宮も昔はかくもおはしまさざりき

此の藤壺と云ふ者参りてなん、おのれならぬやんごとなき人の御為もかくのみなん。世の中に経侍る年頃の、世の人の、とありかゝりとうけ給はるることに、殿の御事をぞ思う給へつる。(同) 国譲上 六三、六四頁

まず(五)の前者は、兼雅が梨壺に東宮が懐妊を承知していられるのかと問い、世間の人の口さがない噂が心配だというのである。

ここでの「世の人」の噂は、兼雅にとって家の浮沈にかかわる大事として受けとめられているのである。後者は兼雅が梨壺に世間の人のするように、東宮は懐妊を認めたのかと問うているのである。

「世の人のすること」は世間の慣例というくらいの意味であろう。「世の人」の噂にしろ慣例にしろ、それらのありようは兼雅にとって家の大事として受けとめられているのである。

方法としての「世人」・「世の人」をめぐって——初期物語・日記文学・『源氏物語』の用例に即して——

「世の人」、世間というものの重さを『宇津保物語』は物語世界の一環にはつきり組み込んだのである。それは作中人物の内面に深刻にかかわるものとはいえないかもしれないが、なんらかの形でその存在は主人公や登場人物が自らの行動や判断を固めていく上で、無視しがたい影響力をもつものとして設定されていると考えられる。上に検討した例以外の場合でも『宇津保物語』の「世の人」の使われ方は登場人物の行動や判断を制約する役割を果しているといえよう。

(六)の例は昭陽殿女御の述懐であるが、上記の例とよく似ていると思われる。藤壺に夢中になり他の女性たちを顧みなくなった東宮について、昭陽殿女御は入内して以来の「世の人」の何くれの噂をきく辛さも父季明がいてくれたから救われたと、心中を訴える。

「世の人」の噂はここでも昭陽殿の心に重くのしかかっているのである。『宇津保物語』は「世の人」の存在を主人公たちの生き方にかかわる意味をもつものとして設定していると思われる。

『落窪物語』は「宇津保物語」より例は少なく六例で、「世人」「世の人」ともに「世間一般の人」の意味に使われるが、例えば次に見るように、そうした「世間一般の人」と主人公とを対比することで、主人公の理想性を浮き彫りしていく。

(七) 「いでや『降るとも』と言ふこともあるを、いとどしき御心ざまにこそあめれ。さらに聞えさすべきにもあらず。御みづからは、なにの心地のよきにも、来むとだにあるぞ。かかるあやまりし出でて、かかるやうありや。さても世の

人は「今宵来ざらむ」とか言ふなるを。おはしまさざらむよ」(小学館全集本 一一一頁)

(八) 「思ふことやある。御けしきにこそきりげなれ。まろは世の人のやうに「思ふぞや」「死ぬや」「恋しや」なども聞えず。ただ、「いかで物思はせてまつらじ」となむ。はじめより思へば、かかる御けしきの、このほど見ゆるはいと苦しく。(同 二四五頁)

例(七)は阿漕の手紙である。少将は激しい雨のため三日目の夜というのに女君を訪ねることができず、それに対し阿漕が皮肉を言つて少将を責めるのである。「世間の人の言うようにやはりいらつしやらないでしょう」と。「世の人」は世間の常識を代弁するものである。そういう「世の人」の判断は女君の不幸な境遇を当然視しているのである。従つて少将が「世の人」の推測どおりの行動しかないとすれば、彼には女君の不幸を救う資格がないということになる。一度は行けないというものの、しかし、最後は「世の人」の常識的な推測を裏切つて女君を訪ねるところに少将の物語的な理想性が形づくられることになる。

例(八)は、少将の女君に対する深い愛情を語る会話文である。彼は自分は色好みの世間一般の男性と違つて、「死ぬや」とか「恋しや」とは言わないが、「いかで物思はせてまつらじ」と思つていると言い、女君の不安を取り除く。「世間一般の男」とは違つて少将を際立たせるのである。これらは純愛の男君としての少将の理想性を形づくる上での「落窪物語」の一貫した方法であるといえよう。

初期物語の「世人」「世の人」の役割は以上述べた如く、「竹取物語」においては「世の人」が登場人物であるか否かに拘わらず、作中人物にとつて常に外在的であるのにすぎなかったが、「宇津保物語」になると「世の人」は主人公や登場人物が自分の判断や行動を固めていく上で、その評や噂が無視しがたいものとして、登場人物の行動とか判断を制約する役割を果すようになる。「落窪物語」は六例とも「世間一般の人はこうであるが、少将(後に中将、太政大臣にまでなる)はそうでない」と違う点を強調して、少将の理想性を際立たせるのである。これは「落窪物語」の「世の人」の顕著な技巧的特色である。

歌物語について見ると、『伊勢物語』に二例見られる。

(九) 奈良の京ははなれ、この京は人の家またさだまらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。(小学館全集本 二、西の京 一三四頁)

(十) むかし、紀の有常がりいきたるに、歩いて遅く来けるに、よみてやりける。

君により思ひならひぬ世の中の人はこれをや恋といふらむ返し、

ならばねば世の人ごになにをかも恋とはいふと問ひしわれしも(同 三八 恋といふ 一六六頁)

例(九)は、西の京に住んでいるある女は心が世間の並みの人以上にすぐれていたと述べているところで、ここでの「世人」は比較の基準として使われている点、『竹取物語』の例(二)と類似の用法である。例(十)は紀有常と友人のたわむれの贈答歌である。有

常を訪ねて来た友人が、有常が不在だったので、後で有常に送った歌である。友人は有常に会えなかつた心境を恋をする気持ちにたとえ、「世の中の人」のいう恋というものについてわかつた気がしたと言ひ、それに対し有常は逆に「世の人」がそれぞれ何を恋としようか、あなたに尋ねたいと応じるといふものである。これは男同志の風流な贈答歌である。ここでの「世の人」は友人や有常のよく知らない恋というものについて了解している人を意味する。この二人はそういう「世の人」の知見を種にして戯れているのであり、「世の人」は二人と対等の位置にいる第三者といつてよいであらう。それは二人にとって単なる外在的存在であるのでもない反面、特別利害關係があるといふでもない。その場に存在してはいないけれど、登場人物と同等の位置にいる存在といつていいと思う。これは贈答歌における例であり、物語の散文の中における場合と一概に同一視できないが、「竹取物語」「宇津保物語」「落窪物語」における「世の人」の位置とやや異なるのではなからうか。

「平中物語」にも「大和物語」にも「世人」「世の人」の語は見られず、「世間の人」の意味で使われている語は「大和物語」では「世間」といふ語で一ヶ所見られる。

二

日記には概して用例が少ないが、物語の場合と比べると「世の人」がより内面化されていると思われる。「土佐日記」には一例もみられず、「蜻蛉日記」が一番多く五例ある。

(一) かくはかなながら、年たちかへる朝にはなりけり。年ごろ

方法としての「世人」・「世の人」をめぐって——初期物語・日記文学・「源氏物語」の用例に即して——

あやしく、世の人のする言忌みなどもせぬところなればや、かうはあらむとて、起きて、ゐざり出づるまに(小) 学館全集本 安和二年一月 二〇三頁

(二) 「今日、殿おはしますべきやうになむ聞く。こたみさへおりずは、いとつべたましきまになむ、世の人も思はむ。またはた、世にものしたまはじ。さらむ後にものしたらむは、いかが、人笑へならむ」と、人々おなじことどもをものしたるに、いとあやしきことにもあるかな、いかにせむ、こたみはよにじぶらすべくもものせじと思ひ騒ぐほどに、(同) 天禄二年六月 二八一、二八二頁

例(一)は、兼家との思うようにならない身の上を嘆きつつ、新しい年を迎えた道綱母が(作者がどこまで本気で言っているかは問題ではあるが、軽い冗談のつもりで言っているにしても)今までしなかつた言忌みなどをして運だめしをしようかという場面である。

「世の人」は、言忌みとか盆とか勤行など世間一般の慣例、常識を体現している人を意味する。「蜻蛉日記」の作者にとって自分の人生の不如意な現実が世間一般の人がする「言忌み」とか勤行などもしないせいなのだといふのである。「世人」のすること、世間の慣習、慣例の重みがここには如実である。それは自分の人生の現実と対等に対置されているといふべきであらう。むしろ例(二)の記事からは、これまで作者は「世人」のすることを平気で無視してきたのであるが、今やそういつていられない事を告白していると解されるのであり、そうとすれば「世人」のすることを同じようにしようとする作者は「世間」といふ存在の重みに気圧されるようになった

のだと言えよう。

例(二)は作者のところが兼家が来るという知らせを京にいる人達からもらい、下山の勧めも受け、落ち着かない反面、作者は兼家の強要でやむなく下山したと、周囲の人にも自分自身にも理由つけて下山したい気持ちなのである。ここでの「世人」は作者を説得するために「人々」によって利用されているのだが、それはまた「人々」の常識であり判断であったといつてよい。そういう「世人」の導入によって道綱母の苦境は真实性をもったものとして表現されてくる。「蜻蛉日記」は、「世人」、世間、社会というものの重圧を作者の心情の形象の中にはつきりと位置づけたといえるのではなからうか。

『和泉式部日記』は二例のみである。

(三) ものばかり聞こえむと思ひて、西のつま戸に円座さし出でて入れたてまつるに、世の人の言へばにやあらむ、なべての御さまにはあらずなまめかし。(小学館全集本 八八頁)

(四) 雨うち降りていとつれづれなる日ごろ、女は雲間なきながら、世の中をいかになりぬるならむとつきせずながめて、「すぎごとする人々はあまたあれど、ただ今はともかくも思はぬを。世の人はさまざまに言ふれど、身のあればこそ」と思ひて過ぐす。(同 九五頁)

例(三)も(四)も「噂をする世間の人」の意味である。例(二)は「世の人」の評判を聞いているせいで、尚更帥の宮の美しさが感じられるのであり、例(四)は言いよつてくる男たちは多くても自分自身は何の気持ちもおこらないのに、世間の人がとやか

く噂するのはつらいけれど、どこかに隠れてでも生きてさえいればと思つたのである。特に(四)は女の自問自答する心中語として使われていて、彼女の心に奥深く入り込み影響をあたえていて、内面化された「世の人」の位置をよく示していると思われる。

彼女は自分の噂をする「世の人」の存在を自分の生き方と関らせているのである。それは重く彼女の心に浸透してくる存在である。ここでの「世の人」はそれを基準として、あるいはその思惑に照らして自分の判断を決定するというような規範的、慣例的、常識的な判断基準となる存在としてあるのではない。彼女の生き方に重圧となつてのしかかり、葛藤を引き起こす存在なのである。それは『和泉式部日記』における女の生き方に深い陰影を付与するとともに、作品に興行きを与える役割をも果していると思う。

『紫式部日記』には四例が見られるが、『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』とは位相が違ふように思う。そこでは「世の人」は作者の独自の思索を紡ぎ出して行く上で重要な役割を果していると思われるのである。四例全部を挙げて考察してみる。

(五) 齋院に、中将の君といふ人はべるなりと聞きはべる、たよりありて、人のもとに書きかはしたる文を、みそかに人のとりて見せはべりし。いとこそ艶に、われのみ世にはものゆゑ知り、心深き、たぐひはあらじ、すべて世の人は、心も肝もなきやうに思ひてはべるべかめる。(小学館全集 本 二三〇頁)

(六) その心なほ失せぬにや、もの思ひまさる秋の夜も、はしに出でるてながめば、いとど、月やいにしへほめてけむと、

見えたる有様をもよほすやうにはべるべし。世の人の忌むといひはべる鳥をも、かならずわたりはべりなむと、はばかられてすこし奥にひき入りてぞ、さすがに心のうちにはつきせす思ひつづけられはべる。(同 二三八、二二九頁)

(七) さまよう、すべて人はおいらかにすこし心おきてのどかに、おちぬるをもととしててもこそ、ゆゑもよしも、をかしく心やすけれ。…中略…人すすみて、にくいことしいでつるは、わろきことを過たらむも、いひ笑はむに、はばかりなうおぼえはべり。いと心よからむ人は、われをにくむとも、われはなお、人を思ひうしろむべけれど、いとさしもえあらず。慈悲ふかうおはする仏だに、三宝そしる罪は浅しとやは説いたまふなる。まいて、かばり濁り深き世の人は、なほつらき人はつらかりぬべし。それを、われまさりていはむと、さはあらずもてかくし、うはべはなだらかなるとのけぢめぞ、心のほどは見えはべるかし。(同 二四二、二四三頁)

(八) かく世の人ごとのうへを思ひ思ひ、はてにとぢめはべれば、身を思ひすてぬ心の、さても深うはべるべきかな。何せむとにかはべらむ。(同 二四七、二四八頁)

例(五) は中宮方と齋院方との比較を論じつつ齋院の中將を批判しているところで、中將の君が「自分以外の人は深い心もすっかりした分別もない思っている」という点に、式部は不快感を表明する。ここでの「世の人」は「紫式部を含めた中將の君以外の女性」をさしている。紫式部の批判は、中將の君がなぜ自分をどのように

特別にすぐれたものとみなしうるかという点に向けられる。式部はこの批評の前の部分で同僚女房の容姿を批評した後、女房たちの「心ばせ」について一括して「かういひいひて、心ばせぞかたうははべるかし。それも、とりどりに、いとわろきもなし。また、すぐれてをかしう、ころおもく、かどゆゑも、よしも、うしろやすきも、みな具することはかたし。さまざま、いづれをかとるべきとおぼゆるぞおほくはべる。」(二二九頁)と言っている。これは式部の人間観を示していると言えよう。才覚や風情、趣き、信頼など全部を理想的に持ち合わせるということはあり得ないというのであり、そういう立場からすると、中將の君が自分自身だけを特別視する根拠はありえない。つまり、中將の君も「世の人」と同じレベルにいたのである。ここには中將の君の思いがつた独善性を批判しつつ、式部の「世の人」観が示されていると思われる。

例(六) は、一見すると『蜻蛉日記』の使い方とよく似ている。月を眺めていると、「世間の人々が忌むという鳥もきつとわたつてくるだるうとはばかれて」奥に入る(二二九頁)というのであるが、この世間の人は女性を指し、式部もその世間並みの女性と同じような行動をとるといっているのである。しかし、そのように行動しながら「さすがに…」と受けているように、式部は世間の常識に従うことに信頼をおいていない。世間の常識に従いつつ、自分の心の中では尽きることのない物思いが絶えないというのである。世間の常識に従うことと裏腹に孤独な重い思索に沈んでいく紫式部の精神構造の特性が「世の人」に對置されるかたちで示されるのである。

例(七) は様々な女性の姿(特に心の用い方)を観察している条

で、「世の人」は世俗の人、現実の俗でみにくい人間であり、その中に式部自身も含んでいると考えてよい。彼らは目には目を、齒には齒をといたふうに生きているし、そうあることもやむを得ないというのである。それゆえにそういう俗なる人間のとるべき態度として万事見苦しくなく穏やかにゆつたりと落ち着いた態度を心がけるべきだというのである。そうした節度や自重によってしか卑俗な人間の人間関係はうまくいかないのだし、その自重の有無がその人の心の深浅をも明らかにするというのである。これは式部の「世の人」観、人間観といってよいであろう。それは厳しく重く辛辣な人間観に思える。自分をもその中に含んだ「世の人」の姿をこのように捉えたのは、他の作品には見られない『紫式部日記』に独特なものと思う。例(八)はそのような重い人間観察の中で自分の人生を振り返り、そこに深い反省と批判を加えつつ物思いに沈まずにはいられない式部の思索の姿が明らかにされている。「世の人」の口端を気にしながら式部は自分自身の心の奥を凝視している。

このように『紫式部日記』における「世のひと」は「蜻蛉日記」や『和泉式部日記』に見られる例以上に、式部の内部に深く入り込んでいて、式部が自分を映す鏡のような役割をしているように思われる。「世の人」は式部の外部にあるだけでなく内部にある他者をして式部自身を捉え返す視点にもなっていると思われるのである。

三

『源氏物語』では「世人」「世の人」の用例は目に見えて多くなり、第一部では四十九例、第二部では十六例、第三部では二十九例

見られる。用例数が多いのみならずその内容においても複雑な様相を呈していて、ある部分は明らかに物語の方法にかかわって重要な役割を担っていると思われる。『源氏物語』においても「世人」「世の人」がもつ意味は「世間」の噂や評判あるいは常識や慣例などであるが、この不特定多数の意見を手がかりにして作者は物語中の人物や物語の筋を操作していると思われる。

以下第一部に見られる例を四つに分類し、具体的に分析考察してみよう。

(一) 主人公への賛美

(二) 物見高い世間の人の言動

(三) 内面化された「世の人」

(四) 世間の常識、慣例、道徳的な判断などを体现するもの。

おおよそこの四類型に分けられるが、四十九例中三十七例は登場人物全般にわたり、(四)の類型に属する。

(一)の主人公を賛美している「世の人」は四例見られる。

(a) 世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにははしきはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。(桐壺 一一二〇頁)

(b) 皇子は、およすけたまふ月日に従ひて、いと見たてまつり分きがたげなるを、宮いと苦しと思せど、思ひよる人なきなめりかし。げにいかさまに作りかへてかは、劣らぬ御ありさまは、世に出でものしたまはまし。月日の光の空に通ひたるやうにぞ、世人も思へる。(紅葉賀 一一四二〇頁)

(a) の例は、世間の評判も高い春宮に比べても源氏の美しさはたとえようもないという事実が、「世の人が光君と申し上げる」ことによりその美しさに客観性が持たされている。例(b)も同じく源氏の称賛であるが、源氏の超絶した美質を称え、源氏とよりふたつの皇子(冷泉帝)とともに、そのすばらしさがあたかも空の日月のようだと世の人々も思っているというのである。ここでの「世の人」「世人」は光源氏の人物造形の理想性の形象に積極的に寄与しているといえるであらう。

例(二)の物見高い言動をする「世の人」は六例見られる。

(c) のころ、世の人の言ぐさに、内の大殿の今姫君と、事にふれつつ言ひ散らすを源氏の大匠聞こしめして、(篝火 三―二四七頁)

(d) 世の人聞きに、しばしこのこと出ださじ、と切り籠めたまへど、口さがなきものは世の人なりけり。(行幸 三―三 一―二頁)

例(c)は内大臣の落胤である近江君の度外れの言動、性格について世間の人が噂の種にしているというのであり、例(d)も近江君に関して口さがなく噂する世間の人の物見高い様子を語る。(二)の例は六例中五例が内大臣の身内に関する世間の口さがなくい噂で、内大臣の母である大官や源氏が内大臣の処置に対して不本意におもっている場面である。内大臣の人間味のない行為を非難することにより、源氏の人情深さを描くことにもつながっていくと思われるのである。それに対し源氏については式部卿宮の大北の方の源氏非難として次の例が一つだけある。

(e) 女御をも、事にふれ、はしたなくもてなしたまひしかど、それは、御仲の恨みとけざりしほど、思ひ知れとにこそはありけめ、と思しのたまひ、世の人も言ひなししだに、なほさやはあるべき、(真木柱 三―三六七頁)

即ち玉鬘と鬘黒との結婚にしろ、王女御の入内に源氏が冷淡であることにしろ、それらはすべて昔の源氏の須磨退去の時、宮が源氏に冷たくした恨みを今晴らしているからだというのである。それは「世の人も言ひなし」ていることであり、まさにそのとおりであらう、というのである。つまり大北の方は自分の見解を「世の人」の噂によって補強しているのである。こういう「世の人」の噂は源氏の隠された深層心理をあばく役割を担わされていると言つてよいであらう。大北の方という敵役の発言なので非難の程度は軽減されるわけだが、「世の人」の担う意味は源氏の理想性を引き下げる働きをしているはずである。物語のこの段階での光源氏を相対化する手法と関連していると思われる。

(三)の内面化された「世の人」の例は、「宇津保物語」の例(五)に見られるような登場人物の行動や判断を制約する役割として使われ方や、「蜻蛉日記」「和泉式部日記」における用例に近いものである。

(f) など、かくあいなきわざをして、やすからぬもの思ひをすらむ、さ思はじとて心のままにもあらば、世の人の譏り言はむことの軽々しき、わがためをばさるものにて、この人の御ためいとほしかるべし、限りなき心ざしと言ふとも、春の上の御おぼえに並ぶばかりは、わが心ながらえあるま

方法としての「世人」・「世の人」をめぐる――初期物語・日記文学・『源氏物語』の用例に即して――

じく思し知りたり。(常夏 三一―二六頁)

(g) 良清しのびやかに伝へ申す。君思しまはすに、夢現さまさま静かならず、さとしのやうなる事どもを、来し方行く末思しあはせて、「世の人の聞き伝へん後のそしりも安からざるべきを憚りて、まことの神の助けにもあらむを、背くものならばまた、これよりまさりて、人笑はれなる目をや見む。……」(明石 二―二三頁)

(f) の例は源氏が玉鬘を我物にしようか否かという切羽詰まった問題を整理してみているところである。源氏は玉鬘を我物とした時の自分に対する「世の人の譏り」は甘受できても、玉鬘が気の毒だという。それはどんなに愛するといつても玉鬘を紫上と対等に待てできないからである。例(g)は須磨において明石入道の迎えを受けた時のことで、源氏は入道に従うべきか否かを思案するところである。嵐のさなかに夢の中で竜王のお召しや桐壺院の勧告があったことを思い起こしながら、明石入道の迎えに応ずるか否か考えをめぐらすのである。入道に従つて明石に移ることの不体裁を思い悩みながら入道の迎えが神意によるものとしたら神意に従わない方がそれ以上に物笑いの的だろうと明石への移住を決心する。例(f)も(g)も「世の人」は源氏の心の中に内在し源氏に非難や嘲笑をあげせる存在として意識されている。そういう「世の人」の視点を承知して適切な判断や行動を選択していくところに源氏の人間性や確固たる意志を明確にするのである。

(四) の世間の常識、慣例、道徳的な判断を体現したものととして「世の人」は第一部の四十九例中の大部分を占めて、数も多い上

に、その使われ方も多様である。

(h) 明くる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふく思しはばかりて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、さばかり思したれど、限りこそありけれ、と世人も聞こえ、女御も御心落ちるたまひぬ。(桐壺 一―一三、一―四頁)

(i) 源氏の君を限りなきものに思しめしながら、世の人のゆるしきこゆまじかりしによりて、坊にも据ゑたてまつらずなりにしを、(紅葉賀 一―四〇〇頁)

桐壺帝が源氏を春宮に立てたいと思つても有力な後見がなければ叶わぬ事で、この「世の人」の言動は世間の慣例として、規範性をもった言動と言えよう。この「世の人」は帝の考えまで制約しているのであり、その結果に安堵しているのは世間の価値観である。ここでは世間が裁判官のような役割を果していると言えよう。帝と世間との考え方にズレがみられるのであるが、このようなズレはひきつづき次の例にも顕著に見られる。

(j) 七月にぞ后いたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。帝おりるさせたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊に、と思ひきこえさせたまふに、御後見したまふべき人おはせず。御母方の、みな親王たちにて、源氏の公事知りたまふ筋ならねば、母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、つよりにと思すになむありける。弘徽殿、いとど御心動きたまふ、ことわりなり。されど、「春

宮の御世、いと近うなりぬれば、疑ひなき御位なり。思はしのだめよ」とぞ聞こえさせたまひける。げに、春宮の御母にて二十余年になりたまへる女御をおきたてまつりては、引き越したてまつりたまひがたきことなりかし、例の、安からず世人も聞こえけり。(紅葉賀 一一四一九頁)

このように物語は桐壺帝の考えと「世人」の判断のくい違いをくり返し語った。桐壺帝の源氏を春宮にという思いは「世のうけひくまじこと」であり「世の人のゆるしきこゆまじかりし」ゆえに、一度は断念させられたのだが、その思いは藤壺の産んだ皇子に引き継がれ、藤壺の産んだ源氏とよりふたつの皇子を春宮に立てるべく、その強力な後見として藤壺を中宮に立てることになるのである。これは弘徽殿女御のみならず、「世人」にも「穏やかならぬこと」と思われたのである。こうして桐壺帝と「世の人」との思いのズレがくり返し語られたことは、桐壺帝の光源氏立坊への願いがいかに強かったかを示すとともに、この帝がたとえば朱雀帝などとはことなつてはつきりした自分の意志をもち主張する人物として形作られてゐることを示すものであるが、それと同時に高麗の相人によつて予言された光源氏の王権、帝王相の物語を推し進める方向が示されていたという点で核心的な構想にかかわつてゐると思われる。

「世の人」は常に貴族社会を代弁して、**「源氏物語」**にはこゝういつた「世の人」と登場人物の判断のズレが度々見られる。このズレが新しい物語の状況を語り起こして行く場合が多いと言ふこともできるだろう。源氏と六条御息所の関係においても、このズレをてこに話が進められている。

方法としての「世人」・「世の人」をめぐつて — 初期物語・日記文学・「源氏物語」の用例に即して —

(k) やむごとなくわづらはしきものにおぼえたまへりし大殿の君も亡せたまひて後、さりととも、世人も聞こえあつたかひ、宮の内にも心ときめきせしを、その後しもかき絶え、あさましき御もてなしを見たまふに、まことにうしと思す事こそありけめと、知りはてたまひぬれば、よろづのあはれを思し棄てて、ひたみちに出で立ちたまふ。(賢木 二一七五頁)

(一) あはあはしうき名をのみ流して、あさましき身のありさまを、今はじめたらむやうに、ほど近くなるままに、起き臥し嘆きたまふ。斎宮は、若き御心地に、不定なりつる御出立の、かく定まりゆくをうれしとのみ思したり。世人は、例なきことと、もどきもあはれがりもささまに聞こゆべし。何ごとも、人にもどきあつかはれぬ際は安げなり。なかなか世にぬけ出でぬる人の御あたりは、ところせきこと多くなむ。(賢木 二一八三頁)

ここは葵上亡き後は六条御息所が源氏の正妻になるだろうと「世人」も思い、御息所もひそかに期待していたにもかかわらず、源氏はその期待を裏切つて冷たい態度を見せたので、御息所は絶望して伊勢下向を決定したところである。(k) の「世人」は御息所の期待を代弁するとともに、その期待が貴族社会の妥当な常識のうちにあつたことを示している。言い換えれば、御息所の期待は世間も当然のことと見ていたことであり、彼女には世間の支持が寄せられていたことである。ところが源氏はそれを裏切つた。御息所の絶望は「世人」のそうした暗黙の支援があつただけに

一層深いのである。ところが(一)では、彼女が斎宮と共に伊勢に下ることになると、世間は非難と同情の入り交じった態度を示したという。世間が御息所の期待に支持を与えていたなら、期待を裏切られて伊勢に下る彼女には同情だけが集中し、非難は源氏に向かつてよきように思えるが、物語はそのようには語っていない。このよな「世人」のありかたは主人公光源氏への非難がこの段階の物語ではタブーであったということを示すのかもしれないが、また一面では世間というものの気まぐれさを描いているのであるともいえる。例のないことには批判的になる世間というものも保守的なありかたがそこには示されている。それはまた世間的な常識や基準に背く光源氏の生き方を形象する媒介項にもなっているのである。「世人」の設定は実に多面的な意味をもっていたといえると思う。

「世の人」、世間というものは気まぐれで、保守的で自己保身的であって、主人公にとっても決して常に頼りになる存在ではないという「世の人」の位置付けが物語には厳としてあったのである。

(m) おほかたの世の人も、誰かはよろしく思ひきこえん。七つになりたまひしこのかた帝の御前に夜昼さぶらひたまひて、奏したまふことのならぬはなかりしかば、この御いたはりにかからぬ人なく、御徳を喜ばぬやばありし。やむことなき上達部弁官などの中にも多かり。それより下は数知らぬを、思ひ知らぬにはあらねど、さしあたりて、いちはやき世を思ひ憚りて、参り寄るもなし(須磨 二一七六頁)

(n) さやかに見えたまひし夢の後は、院の帝の御ことを心にか

けきこえたまひて、いかでかの沈みたまふらん罪救ひたてまつる事をせむ、と思し嘆きけるを、かく帰りたまひては、その御いそぎしたまふ。神無月御八講したまふ。世の人のなき仕うまつること、昔のやうなり。(濡標 二二六九頁)

例(m)は、桐壺帝のそばにいつも伺候していた源氏から庇護を受けた多くの人たちは、今源氏の須磨行ききの悲運を嘆いているのであるが、右大臣側の専横の時勢に遠慮して源氏を訪ねることをしなないというのである。須磨行きに際し、源氏は「世の中はあぢきなきものかな」(須磨一七六頁)と靡きやすい世間の人の心に絶望的になり、「世の人」の両面性をしみじみと知らされる。例(o)では京に復帰した源氏に、昔のように「世の人」が仕える様子が描かれている。「世の人」とはそのように時世になびきやすいものだということであるが、物語はそれを格別非難しているようには見えない。むしろそこに「世の人」の複雑な現実を描いているのだと言えよう。そしてそういう「世の人」の姿を源氏に体験させることで、京への復帰以降の源氏の有能な政治家としての描写がリアルになっていくと言えよう。いいかえれば、光源氏はひとまわり人間的に成長したものととして、人間の表裏に理解をもつものとして、その理想性を更新していくのである。

以上、第一部の「世の人」の用法を概略検討してみたが、「世の人」はある時には光源氏を賛美する存在として彼の理想性を高める役割を担い、ある時には源氏を非難する存在として源氏を反省させる役割を担った。そういう「世の人」は物見高く口さがない野次馬

的な存在であると同時に、不幸な人への同情を示すやさしい存在であったが、また一方では保守的で常識的であつて慣例や慣習を尊重する存在であつた。それだけでなく彼らは自分達の利害に抜目のない打算的な人間でもあり、主人公を悲嘆させるのもであつた。「世の人」はそのような複雑な性格をもつたものとして物語世界の現実の基底を形づくつているといえる。

そういう「世の人」のあり方を「源氏物語」がどのように位置づけていたかという点で、次の源氏の考え方は興味深い。前にも引いたところだが、須磨の嵐の収まった翌朝明石入道が迎えに来た時のことである。源氏は次のように考えていた。「世の人の聞き伝へん後のそしりも安からざるべきを憚りて、まことの神の助けにもあらむを、背くものならばまた、これよりまさりて、人笑はれなる目を見む。…」(明石 二二三頁)。

源氏にとつて「世の人」のそしりを受けて生きると、神の助けにそむいて生きると、神の助けにそむいて生きると、どちらがより妥当な生き方かというと後者の方であつた。源氏は「世の人」のそしりよりも神の助けに賭けることを決断するのであるが、ここには端的に「世の人」よりも神の存在を重視する考え方が示されている。これは第一部の物語における「世の人」の位置づけを暗示しているように思われるのである。第二部以降については稿を改めて検討してみたい。

註(一) 稻垣智花「大鏡の方法」―「世の人」をめぐる―

『中古文学論攷』第九号昭和六十三年十二月(早稻田大)

方法としての「世の人」・「世の人」をめぐる ― 初期物語・日記文学・『源氏物語』の用例に即して ―

学大学院中古文学研究会刊)

(二) この「鳥」としている部分については、岩波大系本、新潮日本古典集成本、萩谷村「紫式部日記全注釈」本、いずれも「咎」としている。その際の口語訳は「世間の人」が(縁起を昇いで)避けるといいます罪科にも、きつと該当してしまふでしょう(全注釈本 下巻 二三八頁) というふうに訳す。

付記

本稿は「世の人」「世の人」の語彙だけに即してそれぞれの作品におけるその方法的な意味を検討したが、その際、「世」「世の中」「世の中の人」「世間」「世界」など近似の語彙を用例から除外している。これは本稿のテーマにとつて不十分な点であるが、紙数の制限もあり、やむを得なかつた。いずれ改めて検討したいと思つている。また作品としては「世の人」「世の人」の用例は多い(「世の人」二十九例、「世の人」六十例)にもかかわらず『栄花物語』について言及していない。それは『栄花物語』の用例が登場人物を賛美するだけの比較的単純な用法にのみ終始していると思われ、今回はひとまず除外した。

おおむね本文は、小学館日本古典文学全集と岩波日本古典文学大系にもとづいた。